産官学による岸和田城3次元データ化プロジェクト

主担当者	吉田大介准教授（工学研究科）
関係組織・協力機関等	大阪府環境農林水産部、岸和田市観光課、TPホールディングス株式会社、株式会社ニコン・トリンブル、産業技術総合研究所
連携・協力者	20人
期間	2020年3月～現在

対象地域

1 きっかけと展開

●2019年12月に大阪府環境農林水産部と工学研究科間で締結した「ドローンを活用した活動の推進に係る連携協定」のもと、これまでに大阪府が所管する現場において、新しい計測技術やデータの可視化手法を活用し、その有効性や活用法などを大阪府と検証してきた。

●大阪府環境農林水産部（特に、泉州農と緑の総合事務所）と連携した研究活動では、いくつかのドローン（空中型だけでなく水上や水中型も含む）を活用し、広大な造成工事現場の進捗管理や、ため池・ダムの安全で効率的な維持管理手法について検証を進めてきた。

●2020年4月、測量技術に関わる民間企業（TPホールディングス社およびニコン・トリンブル社）と、測量用ドローンや3次元レーザースキャナ（対象物の3次元形状を高精度に計測する測量機器）といった最新機器の有用性や応用性について検証する共同研究を開始した。

●3次元レーザースキャナの高精度データの検証や、その活用方法についての研究を進めるため、また、大阪府のインフラ維持管理業務、地域活性化の取組みの中で、このような測量機器とデータがどのように活用できるのかという観点も含め、岸和田城での計測実験を提案し、岸和田市観光課の協力を得て、実施することになった。

2 概　要

●2020年6月（緊急事態宣言が発令され、城が閉館されている期間）の複数日にわたり、複数の3次元レーザースキャナ（地上据置型とドローン搭載型スキャナ）を用いて、上空を含む城の外観および城内部の3次元形状の計測をおこなった。レーザースキャナによる計測では、まず、スキャナの設置地点を、測量用GNSS(GPS)により高精度（数mm～1cm程度）の位置情報を計測した。これにより、レーザースキャナによる計測データを、より正確な現実座標で示すことができ、他の地点で計測した3次元データとの結合がより正確におこなえる。

●複数の地点で計測した3次元データを結合し、岸和田城周辺を含む外観、ならびに城内部を詳細に可視化した3次元モデルを構築した。このモデルを活用することで、3次元表示がおこなえるだけでなく、城の正確な情報（長さや面積等）をコンピュータ上で計測することができ、岸和田城庭園（八陣の庭）や岸和田城石垣などの重要な文化財の保全にも活用できる。

3 成果や課題

得られた成果

●今回構築した3次元モデルについて精度検証をおこなうため、3次元モデルからいくつかの地点を選択し、精度検証を2020年8月に実施した。精度検証では現実の測点と、3次元モデルでの検証点とを複数比較することで、モデルにどの程度のズレが生じているのかを確認した。この結果、（地点によって異なるが）数cm～数mmの高精度を確認することができた。

●岸和田城の3次元データは、広範囲でかつ高密度のデータであるためにデータ量が大きく、高性能コンピュータであってもデータ処理に時間がかかり、ノイズ除去や3次元モデルの構築・検証作業などに支障をきたしていた。そこで、比較的規模の小さい牛滝山大威徳寺境内（岸和田市）を同様に3次元計測し、ノイズ除去手法や3次元モデルの検証を進めた。また、産業技術総合研究所の協力をいただき、同研究所が開発した3DDB Viewer上で、大威徳寺の3次元データの一般公開をおこなった。

地域との関係で工夫した点

●大阪府との連携活動では、業務の持続可能性やさらなる展開を意識し、相談された内容をすべて大学が対応するのではなく、大阪府側でも可能な範囲で対応いただいた。例えば、ドローンのデータ処理技術や、地理情報システムを活用したデータ管理手法について、共同で作業する機会を設け技術を学んでいただいた。岸和田城プロジェクトにおいては、3次元モデルを用いたアニメーションの制作や動画編集などを大阪府に担当いただいた。

●大阪府ならびに岸和田市に調整いただき、今回の計測実験で得られた岸和田城の3次元データを、オープンデータとしての公開を目指している。これにより、岸和田城のPRだけでなく、まちづくりや教育といったデータ活用を中心とした学校や市民の取り組み（CivicTech）など、今後の取り組みにつなげることを期待している。

感想と今後の課題

●今回の計測実験や3次元データの活用を通じて、自治体や民間企業そして研究機関と連携する機会を得られた。計測実験では、3次元レーザースキャナの高密度な点群データに関する様々な課題や可能性について学ぶことができ、今後の教育・研究の貴重なヒントになった。

●コロナ禍で外出を控えるこのような時期にこそ、今回構築を進めている3次元モデルやドローンの空撮動画により、有数の地域資源である岸和田城ならびに大阪府・岸和田市の魅力発信に活用いただきたい。

（事例報告者：吉田大介）

レーザースキャナ搭載したヘリ型ドローン

据置型レーザースキャナを用いた計測作業の様子

計測データから構築した岸和田城周辺の3次元モデル

計測データから構築した岸和田城の3次元モデル

東南アジアの政治と社会

主担当者	永井史男教授（法学研究科）
関係組織・協力機関等	兵庫県阪神シニアカレッジ
連携・協力者	阪神シニアカレッジ国際理解学科受講生の皆さん（各学年約50人）
期間	2007年～現在

対象地域

1 きっかけと展開

●2006年5月22日に大阪市立大学文化交流センター(大阪駅前第2ビル)で、「東アジア国際秩序の近未来」という題する市民向けの講演を行ったとき、聴衆の中に兵庫県阪神シニアカレッジで国際交流学科（当時）の担当者の方がおられ、その方から後日直接打診があり、講演を引き受けるようになった。

●2007年度～2010年度までは、1年に1度、午前と午後に違ったテーマでお話をしていた。テーマは「現代東アジアの国際秩序」「ASEAN(東南アジア諸国連合)」「日本・東南アジアにおける移民労働問題」などである。2011年度～2016年度は「タイの政治」について1年に1度だけお話していた（但し、2013年度は休講。2015年度は「東南アジアの政治：フィリピンとインドネシア」を別途実施）。そして2017年度以降は、「東南アジアの政治と社会」と題して、「タイの現代政治」（1年生）「タイの近代史」（2年生）「フィリピン」（3年生）「インドネシア」（4年生）の4科目を担当するようになり、今日に至っている。1年に2回、午前と午後に違った学年の方に異なった内容のお話をしている(但し、2020年度は新型コロナの関係で休講)。

2 概　要

●阪神シニアカレッジは、兵庫県が設置したいわゆる「高齢者大学」としては、阪神間で唯一の施設。受講生は兵庫県の神戸・阪神地域に在住する市民の方々（応募時点で56歳以上）で、国際理解学科(「国際交流学科」から2007年に名称変更）に所属する各学年50名の方々(実際には50名を超えることが多いようである)。学科によって学年は異なるが、国際理解学科は4学年制となっている。

●文科系大学で提供される大規模講義に準じた形式で行われていることが多いが、校外学習も学期ごとに1回実施されている。私が担当する講義は、基本的には外国事情の紹介である。パワーポイントと配布資料を使ったオーソドックスな講義であり、授業の最後に5分～10分ほど質疑応答の時間を設けて受講生の方々とやり取りする。熱心な方は授業終了後も質問に来られる。

●15年近く担当してきた中で、テーマも変遷してきた。当初は、大阪市立大学文化交流センターでお話しした東アジアの安全保障をお話しした。その後、自分の専門に近いタイをはじめとする東南アジアの話にシフトした。受講生の反応をみると、大国間の国際関係や国際組織に関する大きな話よりも、具体的な人物の話や社会や文化、さらには講師自身が実際に経験した話の方が反応がよい。2006年9月に発生したタイの軍事クーデターで私自身が経験した話や、タイのバンコクで行われた反政府デモに参加したときの話、フィリピンやインドネシアでの調査経験も交えた話をすると、身を乗り出すような感じで聴講される。

3 成果や課題

得られた成果

●15年にわたる活動の中で、自分が専門とする東南アジアに関する講義を4つも持たせていただき、日本にとって近くて遠い隣国である東南アジアに対する理解向上にささやかながら役に立てたこと。

●阪神シニアカレッジを卒業した方の中には、もっと勉強したいということで自ら勉強会を立ち上げられ、そうした勉強会から講師に呼ばれたこともある。

地域との関係で工夫した点

●1時間半の講義の中だけの工夫に留まるが、できるだけ入りやすいテーマから入ること、地理や民族、言語などといった基本的情報も加えること、教科書的な平板な内容にしないこと、私自身が実際に撮影した写真なども交えつつ臨場感のある内容にすることなどを心がけている。

●受講生の中には、観光旅行や会社の出張などで東南アジアに短期あるいは長期滞在された方もおられるので、毎回授業の最初に手を挙げてもらい、いつ頃どこに住んでおられたのかを聞いたりする。講義中にそうした方に尋ねたりすることで、双方向型の要素も取り入れている。

感想と今後の課題

●私の講義へのアンケートを実施したことがないので、あくまで一方的な感想だが、現在、1年間に4つの講義を持たせていただいているので、興味をもって聞いていただけているのではないかと理解している。

●内容が色褪せないように、内容を常にアップデートすることが何より重要である。そのためには、現地での動きに常にアンテナを張っておく必要がある。

（事例報告者：永井史男）

阪神シニアカレッジのパンフレット

講義スライドより

講義の様子

堺市文化館アルフォンス・ミュシャ館「サラ・ベルナールの世界展」と講演会

主担当者	白田由樹教授（文学研究科）
関係組織・協力機関等	堺市立文化館アルフォンス・ミュシャ館ほか
連携・協力者	―
期間	―

対象地域

1 きっかけと展開

●大学院生時代に、研究テーマであるフランスの女優サラ・ベルナールとアルフォンス・ミュシャの関係を扱った論文に堺市立文化館アルフォンス・ミュシャ館の所蔵品の図版を使用する許可に関してお世話になり、その後、学位論文を元にした著書『サラ・ベルナール　メディアと虚構のミューズ』（大阪公立大学共同出版会、2009年）を公刊する際にも同館のご協力をいただいた。

翌2010年から「生誕150周年記念アルフォンス・ミュシャ展」の企画が立ち上がり、会期中の2011年3月に観覧者（一般市民）を対象にサラ・ベルナールとミュシャの関係について講演を行う形で、協力する運びとなった。また出版企画でも、アルフォンス・ミュシャ館の仲介により、『ミュシャの世界』（新人物往来社、2013年. 2016年にKADOKAWAから『ミュシャのすべて』として再刊）への解説文の寄稿を行った。この出版物によってオペラ「トスカ」のプログラムなどへの寄稿依頼を受けるなど、サラ・ベルナールに関する研究の成果をより広い層に発信する機会が広がった。

その後、2018年から2019年度に複数の出版社・美術館の企画として「サラ・ベルナールの世界展」が開催され、展覧会図録に解説文を寄稿した他、会場のひとつとなった堺市立文化館でふたたび一般市民対象の講演会を行う機会を得た。

2 概　要

●堺市立文化館アルフォンス・ミュシャ館では、2018年11月23日から2019年3月3日にかけて「サラ・ベルナールの世界展」が開催され、講演会「聖なる怪物サラ・ベルナール　女優の歴史と大衆メディア」はこの会期中に展示企画と合わせたワークショップや作品解説ツアーなどのイベントのひとつとして2019年2月17日(日)に行われた。

●講演会の聴講者は約80名で、堺市や大阪市のほか関西の近隣地域からの来場者が多かった。

●講演会では、サラ・ベルナールの生涯と19世紀末から20世紀初頭のフランス社会の状況とともに、その頃までの女優の社会的位置づけ、近代の大衆メディアの普及による俳優の影響力の拡大とそれを利用したサラ・ベルナールの成功術や芸風、同時代の作家や芸術家たちとの関係について解説した。

●その他、ちょうどこの展覧会の会期が始まる前（同年の10月下旬）に、サラ・ベルナールの晩年を描いた舞台コメディ「ライオンのあとで」（黒柳徹子主演・企画製作㈱パルコ）の大阪公演が森ノ宮ピロティホールで行われた（こちらのパンフレットへの寄稿も依頼された）ので、劇場のロビーに展覧会のチラシを置いてもらったり、他の市民講座や大学での授業の折にも展覧会を紹介する形で広報にも協力した。

3 成果や課題

得られた成果

●同じ展覧会の巡回で関東や東北でも講演会を行ったが、堺市立文化館は地元関西ということもあるのか、一番多く聴講者が集まった。フロアの雰囲気や笑い、質問の数、後日のSNSなどの反応でも一番手ごたえを感じた。

この展覧会と講演会を通じて、日本では一般にミュシャのポスター作品のモデルとしてしか知られていない女優サラ・ベルナールについての認知を広めるだけでなく、美術や文学、ジャーナリズム、舞台芸術が互いに影響し合いながらベル・エポックの華やかな文化を生み出していった、当時のフランス社会の一端を伝えられたのではないかと思う。

地域との関係で工夫した点

●講演会は会期の後半だったので、アルフォンス・ミュシャ館の学芸員の方から、企画展示に関するアンケートへの回答や解説ツアーなどでの反応・関心などを情報として提供していただき、また自分でも、この展覧会に関する一般来場者の声をSNSの投稿をフォローして、内容を詰めていった。

例えば「黄金の声」と呼ばれたサラ・ベルナールの声（エジソンのシリンダー蓄音機に記録されたもので、カリフォルニアの大学図書館がインターネット上で公開）をスライドに取りこんだり、モノクロ写真で展示されていたベル島（フランス・ブルターニュ地方）のサラ・ベルナールの別荘が、現在どのように保存・再現されているかを訪問時に撮影した写真画像で紹介しながら、19世紀末から20世紀初頭に活躍したフランス女優の姿をリアルに伝え、展示された品々をより深く鑑賞できるよう工夫した。

感想と今後の課題

●この研究を始めた頃から、美術館の展示や解説資料にヒントを得ることが多くあったが、そうした情報を自分が発信する機会を得て、研究によって得た知見をわかりやすく、かつ正確に伝えることの責任とやり甲斐を感じるようになった。また、講演会では日本演劇への影響について質問される市民の方がおられたり、宝飾デザインの研究をされているという方とお話しする機会もあり、こちらも大いに触発された。

今後も世紀末フランスやヨーロッパの文化を中心にした研究課題の知見を深めつつ、いろんな関心と繋がり、触発し合える機会を広げたい。また、この企画のきっかけとなったのはやはり成果の発信で、著書を刊行してから10年ほどの間に様々な出会いに恵まれた。年々、多忙化してきている状況の中でも、どうにか研究を発展させ、論文や図書などの形で世の中に出していきたいと考えている。

（事例報告者：白田由樹）

「サラ・ベルナールの世界展」ポスター

サラ・ベルナールのドレス

ミュシャ館の展示会場

講演会の様子

和泉市合同調査

地域における歴史的総合調査の取り組み

教育　研究

主担当者	文学研究科日本史学教室
関係組織・協力機関等	和泉市教育委員会
連携・協力者	和泉市教育委員会スタッフと和泉市民
期間	1997年から毎年、夏季休暇中の3日間に合宿形式で実施

対象地域

1 きっかけと展開

●1996年、本学文学部の日本史教員が編さん委員となって和泉市史編さん事業が開始され、翌1997年から日本史研究室（日本史学教室）と和泉市教育委員会の協同による地域の歴史的総合調査「和泉市合同調査」が始まった。

●毎年、和泉市域の1つの町会（その多くは江戸時代の村と一致）を対象として、その地域に残された様々な歴史資料の調査や聞き取り調査を行い、それらを通じて、地域に即した通時代的な歴史を明らかにしてきた。

●例年5月頃に、和泉市教育委員会の市史編さん室のメンバーと日本史研究室の教員・大学院生・学生が参加して合同調査実行委員会を立ち上げ、9月下旬に2泊3日の合宿形式で調査を行う。毎年、日本史学教室に所属する院生・学生の大半が参加している。

●1997年に和泉市小田町で行われた第1回の調査から2019年まで計23回継続し、これまでに29町会を調査してきた（単年度で複数の町会を対象とした年もある）。2020年度は新型コロナウイルス感染症の流行によりやむを得ず中止したが、文学部日本史コースの授業（「日本史演習Ⅳ」）では、2019年度の合同調査で調査した和泉市観音寺町の地主・小作関係、墓地、水利などの関係史料の分析を行った。

2 概　要

●合同調査では主に、①地域内の旧家や町会・宮座などの各組織に残された古文書・記録などの史料調査、②町会役員をはじめとする地元住民への生活・地域運営に関する聞き取り調査、③農業用水路や古い石造物調査を含むフィールドワークなどに取り組み、歴史的な方法を用いた総合的な調査を行っている。

●全体での調査は9月中の3日間に集中して行うが、調査を支える実行委員会の活動は5月に始まり、当日までに調査地・調査方針の確定や地元町会との交渉、調査地の下見、宿泊手配など諸準備にあたる。調査終了後は、成果を取りまとめて調査報告書を作成し、翌年5月に刊行される大阪市立大学日本史学会の会誌『市大日本史』に掲載する。

●和泉市内の町会の多くは、江戸時代の「村」や近現代の「大字」から連続する地域コミュニティ（生活共同体）であり、氏神の氏子組織である宮座や祭礼組織、農業にかかわる実行組合・水利組合や大師講・大峯講・伊勢講など様々な講組織の活動も町会単位で維持されている場合が多い。合同調査では、それらの歴史的な展開を上記の手法によって丁寧に把握してきた。

●現在、和泉市域でも、山間部での過疎化や、都市開発による宅地化・離農の影響により、旧来の生活様式が急速に失われつつある。20年以上にわたる調査の成果は、市域全体の「歴史的現在」を考えるうえでもきわめて重要な意味をもっている。

3 成果や課題

得られた成果

●地域の歴史を、時代区分で輪切りすることなく通時代的に把握することで、人々の生活の場である各町会（＝村）のレベルから「生活構築の歴史」を具体的に解明してきた。また、そうした方法をとったことで、特定の庄屋家文書だけでなく、様々な個人・組織に伝わった歴史資料を悉皆的に保全し、それらの史料的価値・重要性を地域の人々とも共有することができた。

●調査の成果は、『市大日本史』各号に掲載された報告書にまとめられている。また、合同調査で調査した史料群を用いて卒業論文や修士論文・博士論文を執筆する学生・院生も多く、和泉市史編さん事業と併せて、和泉市域の地域史研究は飛躍的に進展している。

地域との関係で工夫した点

●対象の各町会は、自然条件や歴史的条件によってそれぞれ個性的な特徴をもっており、例年同一の調査方法をとることが難しい。そのため、実行委員会では各町会・地域の歴史や現状を把握し、大学側の調査参加者の構成なども考慮しつつ、何をどう調査すべきか模索を重ねている。

●住民への成果還元として、調査最終日に報告会を開催してきたほか、上述の『市大日本史』に報告書を掲載し、調査協力者には報告書部分の抜き刷りを配布してきた。また、実行委員会の動きとは別に、調査後の授業（「日本史講読Ⅲ」や「日本史演習Ⅳ」）でも史料を分析し、受講生有志がその成果を調査地での報告会「歴史トークin和泉」（和泉市教育委員会主催）で発表した年もある。

感想と今後の課題

●参加した院生や学生の多くから「古文書に直接触れる機会を得た」「地域で連続的に残されている近世・近現代の史料や聞き取り調査を通じて、歴史のつながりを実感できた」といった感想が出されており、参加者にとって、時代・分野を超えた広い歴史的視野を持つとともに、日本史学に不可欠な専門知識・技能を実地に身に付ける機会となってきた。

●長年の取り組みを通じて既に多くの蓄積があるなか、合同調査をどう展開させていくのか、これまで以上に工夫が必要な段階である。宅地化や開発の進展とともに地域住民の入れ替わりも進みつつあり、そのなかで多くの歴史資料が散逸・滅失の危機に直面している。現代社会において何をどのように調査するのか、歴史的視点からの議論も必要である。

（事例報告者：齊藤紘子）

地元住民からの聞き取り調査

史料調査（目録の作成）

古文書の内容検討

最終日の成果報告会

「東成区の地域資源」魅力発信のための調査業務

主担当者	水内俊雄教授（都市研究プラザ）、 吉田大介准教授（工学研究科）、天野景太准教授（文学研究科）
関係組織・協力機関等	大阪市東成区役所市民協働課
連携・協力者	東成区役所職員、区内神社宮司・郷土史家、古地図ビュワーライブラリ開発者、 2018年度地域実践演習Ⅳ履修者（約20人）
期間	2017年10月～2020年3月

対象地域

1 きっかけと展開

●2017年7月に東成区役所市民協働課より、①区内のまちづくりを推進する際に、地域課題や地域の魅力を市民が協働的に検討・体験できるようなデジタルプラットフォームの構築の可能性について、②地域に埋もれている歴史資源を発掘し、それらをまち歩きの実践を通じて市民に呈示することで、地域への愛着の醸成をはかることの可能性について、相談を受けた。そこで本学では、区民が自分の住むまちの魅力を感じること、区外の人にも魅力を感じて立ち寄ってもらうことなどを目的に、地域資源に関する情報などのデジタルアーカイブ化を行うための実証実験についての業務を受託し、将来的に、防災・防犯・子育て・観光など、まちづくりに求められている多様な地域情報もあわせて表示・確認できるようなデジタルマップアプリのサンプルを作成した。その作業の中で、学生参加による地域資源の現地調査を通じて、マップ上にアーカイブ化するコンテンツを発掘し、それらの成果を用いながら、市民を対象とした区内のまち歩きを企画・実施した。

なお、本事業で作成したデジタルマップアプリは、「旧村景観の今昔比較」をテーマとしたもので、近世・近代初期における区内に所在した村の景観（神社、集落、河川、地名、区画整理等）と、現在の地域の空間構造とを対照させて画面上に表示する機能を持ったものである。

2 概　要

●2017年度は、事業の方向性の決定、およびデジタルマップの作成に必要な古地図や空中写真群の収集、デジタルアーカイブを担うために用いることができそうな既存のプラットフォームの比較検討と選定を行った。その結果、オープンソースの古地図ビュワーライブラリであるMaplatを採用することとし、複数の古地図やテーマ地図、空中写真群のデジタルデータ化、レイヤー化（座標変換）の作業を行い、PCやタブレット端末の1つの画面上において複数の地図等を切り替え、比較・対照が可能なWEBサイトを構築した。

●2018年度は、WEBサイト上に表現するコンテンツの収集を、CR副専攻の科目（地域実践演習Ⅳ）を通じ、学生の参加を得ながら行った。2018年3月23日には東小橋・中道地区（比売許曽神社・八阪神社周辺）、2018年6月2日に中本地区（八王子神社周辺）、2018年7月14日に大今里・今里地区（熊野大神宮周辺）、2019年3月18日に深江地区（深江稲荷神社周辺）に、区役所職員と学生が帯同し、地元の郷土史家や神社の宮司らの案内に導かれつつ、巡検を行った。同時に、そこで得られた写真や解説動画等のデジタルデータを、Maplatを用いて構築したWEBアプリケーション「ひがしなりまち歩きアプリ」上に、コンテンツとして埋め込む作業を、教員の指導の下、学生が中心となって実施した。

●2019年度は、上記作業を継続して実施するとともに、2019年11月30日に市民を募集して、区内の旧村景観の今昔比較をテーマとしたスタディツアー「“ひがしなり”スマホで魅力発見！まち歩きツアー」を実施した。そこにおいて、参加者にタブレット端末を貸し出し、あるいは参加者自身で所有するスマートフォンを用いてもらうことで、古地図と現前する景観との対照を通じて、地域の歴史的変遷を直感的に感じ取ることが出来るように現地ガイドを行い、作成したデジタルマップアプリを実際のまち歩きのイベントにおいて活用することによる効果について検証した。

3 成果や課題

得られた成果

●本事業では、これまで主に観光地や豊富な歴史的資源を有する地域を対象としてなされてきた古地図ビュワーアプリの開発を、東成区という大阪市の周縁地域を対象として、地域資源の発掘とデジタルアーカイブ化のプロセスを含めて実施したことが特徴である。その過程を通じて、第一に、区内に点在する多様な歴史的景観の痕跡を、魅力を有する地域資源と位置づけ、それらを有機的に結びつけることによって、観光ガイドマップなどのメディアを通じて住民や観光客に発信したり、まち歩きの実践を通じた地域学習への展開可能性を示すことが出来た。第二に、デジタルマップアプリが、古地図や空中写真と現在の地図との対照を目的とするだけでなく、ハザードマップなどを重ね合わせることによって、防災や教育、福祉を含む地域情報を集約するプラットフォームとして活用しうることを示した。

地域との関係で工夫した点

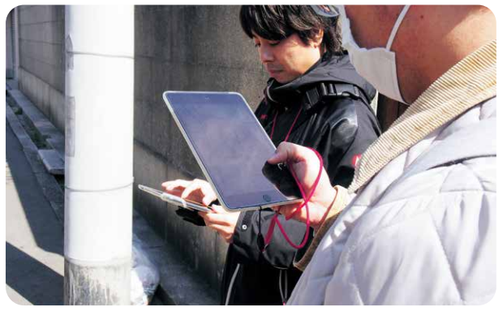
●本事業は東成区役所からの受託業務であったことから、地域連携センターが窓口となる形で東成区役所市民協働課との連携体制の中で進めることが出来た。区の職員の方々には、宮司や郷土史家の紹介や巡検への協力依頼はもとより、アドバイザーとして本学の授業に参加していただいたり、まち歩きツアーの市民への周知などを担っていただいた。また、事業の進捗を地域に報告し、意見交換を行うため、学生を交えて区長への成果発表会を開催したり、アプリの改良を推進するため、Maplat開発者との懇談の機会を設けた。

感想と今後の課題

●課題として、第一に、今回の事業においてテーマとした旧村景観の今昔比較だけではない、さまざまな地域課題を把握し、まちづくりのためのツールとしての活用可能性についての検証が挙げられる。第二に、実務レベルでの体制の構築、すなわち、継続的に市民が積極的に活用することのできる事業として運営するための運営主体（たとえば行政や市民団体等が想定される）の確立や、運営・管理体制の構築についての検討が挙げられる。

（事例報告者：天野景太）

まち歩きツアーの様子


まち歩きにおける地図アプリの効果検証風景

旧村集落と現在との比較を主題とした地図アプリの画面

地域資源発掘のための現地調査の様子

「関係人口」をキーワードにした協働事業とゼミナール教育

阿波踊りコラボ動画制作

主担当者	松本淳教授（経済学研究科）
関係組織・協力機関等	徳島県関西本部、大阪天水連、大阪市立大学 応援団・よさこいサークル「朱蘭」経済学部松本ゼミナール
連携・協力者	大阪天水連、大阪市立大学 応援団・よさこいサークル「朱蘭」・経済学部松本ゼミナール（合計約30人）
期間	2020年度

対象地域

1 きっかけと展開

●経済学部の松本ゼミナールでは、ゼミ生の自主的なまた自律的な学修を促すために地域の事例研究を行っている。
●2020年度は「関係人口」をキーワードに、徳島県との連携を図りながら企画立案・実現を計画した。
●しかしながら、年初からのコロナ禍に見舞われ、現地調査はおろか対面での活動が一切できなくなってしまった。
●しかし諦めることはせずに、できる限りのことをやろうとゼミ生たちと決意し、徳島県関西本部ともZoomを用いてミーティングを重ね、徳島県と大阪市立大学を繋げる動画を作成することを計画した。
●徳島県関西本部を通じて阿波踊りの有名連である大阪天水連様のご理解とご協力をいただくことができた。
●一方で、ゼミ生のつながり等から大阪市立大学・応援団及びよさこいサークル「朱蘭」のご協力の同意を得ることができた。
●さらには、動画制作にあたっては映像制作会社（松本ゼミ卒業生）ともZoomミーティングを重ね、年末には厳重なコロナ感染対策を講じたうえで撮影を行った。

2 概　要

●当初は、徳島の伝統である阿波踊りを大阪天水連と大学生が踊る様子を各自で撮影して、編集した動画を製作する予定であった。
●しかし、それでは我々松本ゼミが考えていた「人と人とを繋げる」という趣旨にかならずしも合致しないという意見が出た。
●そこで、踊りを共有するのではなく、「思い」を共有する動画を製作することとなった。
●具体的には、各団体の取り組んできた活動に対する「熱い思い」、コロナ禍に見舞われて思うような活動ができなくなってしまった「焦り・憤り・絶望」、今自分たちにできることは何であるのかという「問い」、未来へ向けての「希望」といった点をピックアップすることとなった。
●各団体にはこのような趣旨・コンセプトを丁寧に説明させていただき、そのうえで動画制作に協力していただける合意を得た。
●各団体の取り組んできた活動に対する「熱い思い」については、コロナ禍前の日常の活動や成果の場の画像や映像を提供してもらいインタビューも交えながら編集した。
●コロナ禍に見舞われて思うような活動ができなくなってしまった「焦り・憤り・絶望」については、各団体のリーダーへのインタビューをベースに、悩みの細部は異なるものの、その苦悩の様子や落胆の度合いは共通するものがあった。
●今自分たちにできることは何であるのかという「問い」については、「いま、自分たちができることは社会人も学生も同じ」（大阪天水連）、「踊りを通して「楽しい」を伝えるという意味では同じ」（朱蘭）、「この企画で「人を応援できる」機会をもらえたという気持ちはみな同じ」（応援団）と答えてくれた。
●映像制作会社の協力も得て、ゼミ生発案のすばらしい動画ができたと思っている。
※完成動画はYoutubeに限定公開している。

3 成果や課題

得られた成果

●ゼミ生内やゼミ生と教員間でのコミュニケーションにとどまらず、各種団体や映像制作会社の方とのコミュニケーションは想像以上にゼミ生にとって貴重な経験になった。
●これまでのゼミ研究活動は、論文をサーベイして、現地での聞き取り調査を行い、報告書としてまとめるというものであったが、最後に企画実現という「モノを作る」「コトを起こす」という段階までコミットしてもらうことによって、今まで以上に研究活動が「じぶんごと」となり、結果それが「自主性・自立性」につながったと確信している。
●製作した動画は2021年1月にゼミのオンライン企画として成果発表会を行い、各種関係者にご参加いただき、講評をいただいた。

地域との関係で工夫した点

●とにかくZoomミーティングに尽きる。数えきれないほどのZoomミーティングを行った。
●皮肉に聞こえるが、コロナ禍であったからこそ、外部団体の方々とこれほど多くのミーティングを行うことができたと考えている。

感想と今後の課題

●協力の信頼関係を築くという点においては、これまで以上に時間がかかり、リモートという手段の難しさを実感した。
●コロナ禍にかかわらず、「リアル」と「リモート」の融合は今後もトライアル＆エラーを重ねながら、それぞれの長所短所を見極める必要があると感じた。
●今年度の取り組みでは、我々松本ゼミ本位の企画であることが課題の一つであると考えている。つまり、かかわっていただけた各種団体の本質的な「困りごと・課題」に迫ることができていなかった。
●今後、こうした企画のレベルアップを図るために、またゼミ生のさらなるレベルアップを図るために、その本質的な「困りごと・課題」の徹底的なニーズ調査を行うことの重要性を感じている。

（事例報告者：松本淳）

映像制作会社との絵コンテチェックミーティング

完成動画のサムネイル画像（Youtubeにて限定公開）

大学構内での撮影風景

関係者を招いてのリモートプレゼン及び動画公開（2021年1月）